（別紙様式４－１）　　（高等学校用・中学校用）

熊本県立八代農業高等学校　令和３年度（２０２１年度）学校評価表

１ 学校教育目標	
【校　　訓】	礼節を重んず　　勤労を尚ぶ　　誠実に生く
【教育目標】	自ら学び考え、未来を創造する魅力ある人材の育成
【教育スローガン】	新たな一歩を踏み出そう！　　～　プラス１　より高く　より前へ　～

２ 本年度の重点目標

【重点目標】
（１）すべての教育活動における課題解決の推進と危機管理の徹底
（２）学校・学科等の魅力ある教育の深化
（３）効果的な情報発信と生徒募集への取組の推進
（４）効率的、効果的、教職員の協働による教育活動・校務処理の推進
（５）安心・安全で差別やいじめのない学校づくり
（６）特別な支援を要する生徒への全職員共通理解による取組の推進
（７）地域の資源や人材を最大限に利活用した教育活動と教職員研修の推進

【教育方針】
（１）地域に誇れる生徒の育成
　ア 端正な服装と礼儀正しい生徒（礼節）
　イ 目標達成に向けて努力する生徒（勤労）
　ウ 自立心を持ち誠実に行動する生徒（誠実）
　エ 命を大切にする心を持ち他人（ひと）の痛みのわかる生徒
　オ 文化部・運動部・生徒会・農業クラブ・家庭クラブ活動に積極的に取り組む生徒
　カ ボランティアや地域行事等へ積極的に参加し地域貢献ができる生徒
（２）地域に誇れる教職員への支援
　ア 八農スクール・ミッション具現化のための教職員間の意思疎通と充実した取組
　イ 進路指導を核とした学習指導、進学・就職支援体制の構築と取組の推進
　ウ ＩＣＴを活用した授業づくりの構築と取組の推進
　エ 普通教科・専門教科における最新の専門的な知識技術習得のための研修機会の支援
　オ 特別な支援を要する生徒の全職員共通理解と情報共有に努め、保護者等や中学校、関係機関との連携を推進
　カ 研究授業等の活発化による、わかる授業、生徒が主体的に学べる授業づくりの推進
（３）地域に誇れる学校づくり
　ア 積極的な広報活動による「八農教育」情報発信の強化
　イ 幼・保、小・中学校、地域との教育交流の継続と深化
　ウ 積極的なボランティアや地元行事への活動参加による地域社会への貢献
　エ 安心・安全で差別やいじめのない学校づくり
　オ 掃除や整理整頓が行き届いたきれいな教育環境づくり
　カ 地域社会・住民に理解され愛される学校づくり

【 評　価 】
［Ａ］十分達成できている
［Ｂ］おおむね達成できている
［Ｃ］やや不十分である
［Ｄ］不十分である

3　自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	目標管理	教育目標及び重点目標の周知・理解	・全職員が共通認識として実践を行う。 ・生徒、保護者に教育目標を90％以上認知させる。 ・スクール・ミッションの周知	・職員会議や研修等で常時啓発する。 ・教室への掲示、学年集会等、全校集会での周知。 ・ＰＴＡ総会、広報誌、ＨＰ等を通じて啓発を図る。	B	【成果】 ・教育目標や教育スローガン、学校の各種教育活動に関する情報の周知の取り組みについて、アンケートにおいて良好であるとの評価が、生徒 79％、保護者 95％、教職員 100％であり、様々な取り組みの効果が見られた。 【課題】 ・生徒については目標に到達できておらず、周知の場設定や方法を丁寧に行う必要がある。
	生徒募集	募集定員の確保	・募集定員の50％以上の志願者確保を目指した取組みを行う。	・中学校訪問での進路意識の把握、体験入学、HP、スクールガイド等などで特色ある学習内容の広報の充実を図る。 ・HPを活用し、定期的に各行事、学科毎の学習状況を情報発信し、年間閲覧数 9 万回を目指す。 ・新聞等による学習活動の積極的な情報発信を行う。	A	【成果】 ・10 月に延期した体験入学では 74 人（中学生 49 人、保護者 22 人、先生 3 人）の参加があった。 ・ＨＰの閲覧数は 14 万回（4/1～1/31）を超えた。学校行事をはじめ、学科や教科の生徒の学習風景など、ほぼ毎日新しい情報が継続して挙げられたことの効果であると思われる。（ブログ更新 181 回） ・「八農新聞」を毎月、近隣中学校 25 校に訪問して配布した。直接届けて掲示をお願いすることで本校の新鮮な情報を中学生が日常的に目にすることは生徒募集に効果的であると思われる。 【課題】 ・前年度に比べ前期選抜及び後期選抜への応募者数は増加しているが、目標の募集定員の 50%には届いておらず、次年度も継続的な取り組みが必要である。
	業務改善	子供たちと向き合う時間を確保し、やりがいを持って効果的な教育活動を持続的に行うことができる環境の実現	・業務の見直しと効率化を推進し、教職員の負担感軽減を図り、教職員が本来の業務に専念できる環境の整備。	・ゆうnet、文書セキュア等を活用した紙媒体での資料配布の削減 ・簡易決裁による事務処理の簡略化 ・出張復命の簡略化 ・欠席、遅刻届け出システムの活用。 ・各種会議日を統一曜日時間に固定。 ・各校務分掌の業務マニュアルや業務一覧の作成。	C	【成果】 ・左記の具体的な取り組みについては、概ね実施や運用ができた。 【課題】 ・29％の教職員が業務改善の学校の取り組みが十分でないとアンケートで回答しており、左記の具体的な取り組みが、業務改善にあまり寄与していないと考えられる。 ・大幅な業務改善の進展は困難であるが、業務改善を意識し、細かな点を積み上げていくことが必要である。
	働き方改革	教職員が心身ともに健康でワーク・	・働き方改革の必要性を全職員が理解し、長	・SCやSSW等の外部専門家の活用。 ・学校閉庁日、定時	A	【成果】 ・91％の教職員が学校は働き方改革に取り組み、健康やライフワーク

		ライフ・バランスを実現できる環境を整える。	時間労働の解消を目指した取組みを行う。 ・時間外勤務の上限の全職員実現を目指した取組みを行う。（月間時間 45 時間以内、年間360時間以内）	退勤日、部活動休養日の設定。 ・年次有給休暇の毎月 1 日（年間 10 日）の取得の推奨。		バランスを実現できる環境を整えていると思うとアンケートで回答。 ・SCの面談の申請方法の見直しなどを行い利用が増加した。（1 月末時点　R2 年 25 件→R3 年 28 件）また、生徒だけでなく保護者や職員の利用も増加している。 ・SSWの申請は 2 件。別途、個別の相談や保護者面談等への同席も行われた。専門的な助言を得ることで的確な生徒指導に繋がった。 ・夏季休業中の閉庁日を 4 日間設定した。 ・年次有給休暇の取得日数が平均約 8 日（4～12 月）で概ね毎月 1 日の取得であった。 【課題】 ・SCの面談を生徒が直前でキャンセルすることが数回あり、運用上の課題である。 ・毎週水曜日に会議を集中させ、部活動も休養日としている。また定時退庁日ともすることで早めの退庁を促す効果があるが、まだ徹底されていないとともに、業務量の平準化も課題である。
学力向上	確かな学力の育成	基礎学力の向上	・家庭学習時間の増加	・HR や授業で学習の大切さを説く。 ・家庭学習時間調査を年 2 回実施し、1 日平均 60 分以上を目指す。	B	・家庭学習時間調査を 2 回実施した。1・2 年生合わせた平均は 1 学期 119 分、2 学期 88 分であった。1日平均の目標 60 分以上は達成した。
			・「一日一善」の取組充実	・「一日一善」については、学力の基礎基本の土台作りとなるため、毎朝の習慣付けを行う。また、学期毎にまとめ考査を行い、前学期を上回るように指導・助言を行う。	B	・各学年の先生方の粘り強い学習指導によって毎朝の習慣として受け入れられ、自主的な取組が見られた。学校評価アンケートでも 90%の生徒が基礎学力の定着に取り組んでいると答えた。ただし、学習の定着を見る「まとめ考査」については検討の余地がある。
		知的好奇心の喚起	・学ぶ楽しさや興味関心が高まる授業の展開	・学期毎に 1 回公開授業週間を設定する。 ・研究授業を各教科 1 回以上実施する。	B	・研究授業については、全教科、学科で実施済又は実施予定である。
			・学習評価の妥当性や信頼性等の向上	・授業評価アンケートの実施方法を見直し、信頼性を高める。対象職員について、7 月と 12 月の 2 回実施し、2 回目の評価平均が 1 回目より上回る。	B	・対象職員について授業評価アンケートを 2 回実施した。授業評価は本年度より、クロームブックを利用したアンケート（forms）を行ったが、即座に先生方へ結果が返ってくるので授業改善につながった。
キャリア教育（進路	組織的・系統的な	基礎学力の定着	・基礎学力診断テストにおい	・教務部と連携した基礎学力定着の取	C	・教務と連携した「一日一善」に取り組み、校内進路模試を3年生で4回

指導）	進路指導		て、D3 ゾーンの-10% ・生徒・保護者に基礎学力定着の取組を意識させる 90%以上	り組み（一日一善） ・「登竜門」を活用し、校内進路模試の実施 ・基礎学力診断テスト振り返りワークシートの活用 ・基礎学力診断テストの結果をもとに、各教科（国・数・英）で、定着していない分野等を分析してもらい、学年・学科と情報の共有を図る		実施、2年生においては3学期に2回実施予定である。 ・各学期に基礎学力診断テストを実施し、事前に目標設定、事後に振り返りができるワークシートを活用することができた。また、結果をもとに各教科で分析を行い、学年・学科と情報共有した。D3 ゾーンは第 1 回 46.5%、第 2 回 47. 7%となり、目標の-10%には及んでいない。振り返りワークシートの活用方法を検討、基礎学力定着に向けて、職員間での共通した認識を図る必要がある。 ・学校評価アンケートにおいて、「基礎学力の定着に取り組んでいる」と回答した生徒 90%、保護者 87%となり、目標の 90%以上を概ね達成することができた。
		進路意識の向上	・生徒・保護者に進路相談の取組を実感させる 90%以上 ・進路未定者 10%以内	・個人面談、キャリサポーターとの面談を実施し、生徒の進路希望の把握をする ・「進路ナビ」の改訂を進め、活用の充実 ・職員による進路講話・キャリアガイダンス、外部講師による進路ガイダンスを実施	B	・6 月に 3 年生、1 月から 3 月にかけて 2 年生を対象にキャリアサポーターとの面談を実施したことで、生徒の進路希望を把握することが出来た。 ・「進路ナビ」の改訂が進み、内容が充実しさらに活用しやすくなった。 ・進路講話・キャリアガイダンス、外部講師による進路ガイダンスを各学年で実施することができた。 ・学校評価アンケートにおいて、「進路相談に親身に取り組んでいる」と回想した生徒 90%、保護者 88%となり、目標を達成した。また 11 月の進路希望調査では、進路未定者は 10.3%であり、目標を概ね達成した。
	勤労観・職業観の育成	キャリア教育の充実	・各学科とキャリア教育について情報共有し、キャリア教育の再構築 ・離職状況調査の実施し、離職理由等を職員間で共有する	・進路資料の整理を行い、進路情報を月に1回以上発信する ・キャリア教育推進委員会を月に1回程度開催する ・企業訪問や電話連絡し、離職状況調査を行い、共有ファイルを活用して職員間で情報共有する。	C	・進路閲覧室の資料整理を行い、資料を閲覧しやすくなり、進路便りを4回発行した。 ・キャリア推進委員会を学期に 1 回程度開催し、各学科と連携を図ることができた。R2 年度卒の離職率は、14.3%であった。 キャリア教育が体系的・系統的になるよう計画を再検討し、定着指導につながるキャリア教育を構築していくことが課題である。
		個々の適性に応じた主体的な進路選択 支援を要する生徒の進路保障	・1 月末時点において、3 年生の進路未決定者 3 名以内 ・支援を要する生徒の進学先 ・就職先の確保	・キャリサポーターとの面談や個人面談の実施 ・担任、教育相談部と連携し、組織的に対応する ・就職相談会等の情報提供を行う ・支援を要する生徒を対象とした、職場	B	・キャリサポーターとの面談や個人面談を実施し、組織的に生徒の進路指導に対応した。また、就職相談会等の情報提供を、適宜行った。1月末時点において3年生の進路未定者は2名であり、目標を概ね達成した。 ・関係機関と連携を深め、支援を要する生徒の職場体験、就職先の確保などに努めていく。

				体験の実施		
生徒指導	規範意識の高揚	校則の遵守と基本的生活習慣の確立	・挨拶や時間、整容 、正しい言葉遣い、社会ルールなどの遵守 ・特別指導の対象者年間 10 人以下	・登校指導やHR、授業などでの規範意識を育む指導や全校集会での道徳講話及び、交通教室の開催。	C	・登校指導やＨＲ活動での校則及び基本的生活習慣の確立を促してきたが、８名に対して特別な指導を行った。 ・新型コロナの影響で講話や交通教室が実施できなかったことが課題である。
		生徒指導方針の共有	・生徒指導方針に則った指導の実施。学校評価アンケート 3.3	・職員研修等による生徒指導方針の周知と職員間の連携。	A	・特別な指導の周知を図ることで、多くの職員が連携し生徒の指導にあたることができた。 また、学校評価アンケートでも 3.6 ポイントを達成した。
	中退者対策	学校生活への適応	・学校生活満足率、全般・交友 90%、自尊感情 70%以上	・人間関係スキルアップトレーニングの実施。	B	・１学年生徒と全職員の面談や学期ごとの面談週間でコミュニケーション能力の向上に繋がった。 ・学校生活の満足度約 80%、自尊感情約 60%と目標値を若干達成できなかった。
		細やかな指導の確立	・個々の生徒の実態把握	・QUテスト、いじめアンケート・活用し実態把握。 ・面談週間、新たな絆をつくる面談の実施。	B	・こころのアンケート、スクールサインの初期対応と関係職員の連携がスムーズで重大事案に発展することはなかった。 また、職員の面談を通して情報共有が円滑に行えた。
	生徒会活動の活性化	集団活動に自主的・実践的に取り組む姿勢	・学校評価アンケート 3.5 ポイント以上	・常任委員会の定期的な開催。	A	・各種委員会の取り組みが生徒主導で活発的に実施できた。 ・学校評価アンケートでも 3.5 ポイントを達成できた。
	安全安心な学校作り	交通事故ゼロ	・登下校時の交通事故の加害者及び被害者にならない。	・全職員と交通委員による登校指導。 ・スタントマンを活用した交通講話。	C	・交通事故件数が３件で交通指導の強化が必要であると痛感した。 また、新型コロナの影響でスタントマンを活用した交通講話が実施できなかった。
	問題行動等の未然防止	懲戒処分発生件数ゼロ	・問題行動等による懲戒処分の発生件数ゼロ	・学校生活の様々な場面で全職員の目配りと気配りによる指導。 ・長期休業前の注意喚起。	B	・懲戒処分の発生件数０件。全職員が生徒の状況把握に務め、安全安心な学校作りに取り組んだ。 ・長期休業前には生徒・保護者に口頭及び文書で注意喚起を行った。
人権教育の推進	自他の良さを認めあえる人間関係の育成	人権意識の啓発	・LHRにおける人権教育の充実 ・生徒や保護者、職員の人権意識の向上	・3 年間を見通しての人権LHRの計画・実施。 ・人権教育講演会の実施。	B	・3 年間の計画がきちんとできているが、行事日程の変更等にあわせた見直しが課題である。 ・人権教育講演会がコロナの影響で実施できなかった。
	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	・自他の人権を守る実践的行動力を身につけるための指導方法の習得	・外部研修会等への参加を推奨（各職員 2 回） ・外部講師等を活用した校内研修の充実。	C	・主担者が変わり、研修への周知等の仕方に課題を残した。 ・外部研修会等への参加が困難な状況だったので、オンライン研修の活用などを積極的に活用したい。 外部研修の参加は各自 1 回はできたようだが、2 回の研修参加が徹底できなかった。

	命を大切にする心を育む指導	自他の生命を尊重する心と自尊感情の育成	・自己実現に向けた意識向上と達成に向けた取組み支援	・生命尊重・自尊感情の育成を目指した授業の展開や講演会の実施。	B	・性的マイノリティに関する研修等を実施できたが、生命尊重・自尊感情の育成を目指した授業の展開は全体を通じての取組を具体的に示した形で実施できていなかった。
いじめの防止等	いじめの防止	未然防止に向けた日常的取組	・日常の学校生活における未然防止の徹底	・「いじめ防止基本方針」に沿った全教職員の共通理解と同一歩調での取組み。 ・ストレス対応プログラム・SOSの出し方に関するLHRの公開授業完全実施	B	・本校のいじめ防止基本方針の周知を年度当初に全職員に示し、各分掌や学年でのいじめ事案に対する対応が確立できている。 ・各学年の年間計画にストレス対応プログラムやＳＯＳの出し方に関するＬＨＲを設定し、実施している。
			・学期ごとの検証	・取組状況を学期ごとに検証し、次学期に活かす。 ・いじめ対策会議の内容で必要な情報を全職員へ周知する。	B	・学期ごとにいじめ対策委員会を開催し、臨床心理士から助言をいただいた。 ・いじめ対策会議を必要に応じて臨時開催し、問題解決と情報共有に努めた。
			・校内研修の実施	・いじめアンケートやＱ－Ｕ、シグマを活用した状況把握といじめ未然防止に向けた研修の実施。 ・より具体的な事例を活用したシミュレーション研修の実施。	B	・こころのアンケートの結果からいじめ対策委員、臨床心理士や必要に応じてＳＳＷに依頼し、問題解決に取り組むことができた。 ・職員研修ではスクールロイヤーを活用し、法的な視点を取り入れより身近な事案での研修を実施した。
		早期発見・早期対応	・いじめに関する実態調査	・いじめアンケート及び心のアンケートを活用した早期発見と迅速な対応。 ・アンケート後、事案把握・補完のための面談（B表）実施。 ・新たな絆をつくる面談の実施。 ・いじめ匿名通報アプリ導入の導入・説明の特設時間を設定。	B	・こころのアンケートの結果は関係職員で即日対応し、状況把握と迅速な対応に取り組んだ。 ・アンケート後、担任・副担任で面談を実施し事案解決に取り組んだ。 ・「新たな絆をつくる面談」を実施して生徒の相談体制の拡充を図った。 ・４月当初にいじめ匿名通報アプリの導入と説明を学年ごとに実施した。
			・初動対応組織を検証と見直し	・いじめ対策委員会を経て、現状に即した具体的な対応組織の改訂	B	・昨年度、組織の見直しを行い今年度はスムーズな業務が遂行できた。
地域連携（コミュニティ・スクールなど）	学校運営協議会を通し地域と連携協力体制の確立と特色ある学	地域や保護者の学校運営への参画	・学校の課題の共有を図り、学校の魅力化や特色化に取組む	・魅力化、特色化に向けた校内プロジェクトの取組み。 ・各種指定事業の推進。 ・学校の情報の積極的な発信。	A	・新たな17のプロジェクトや各種指定事業について、学校運営協議会において協議の場を設けることができた。 ・学校HPをはじめ、八農新聞の配布、SNSでの情報発信等、積極的な情報発信の取り組みが、あらゆる

	校づくり					方面から全職員的に行われた。
		自主的に学び、考え行動できる生徒の育成	・防災教育の 3 原則である自助、共助、公助を軸とし、年に 2 回の防災避難訓練や学校行事（文化祭等）と連携した防災教育を実践し、防災意識を高揚させる。	・生徒が地域防災の担い手になるべく知識・技術を身に付けるための、防災教育の実践。教科、集会等で各災害の発生メカニズム等の理解を図る。 ・避難訓練のテーマを明確し、職員、生徒がより実践的な対応を行えるようにする。	A	・新型コロナウイルス感染拡大防止措置を行いながら、地域と連携した防災（地震・津波）避難訓練を実施することがで、住民の方々が来校する機会を設けることができた（地域住民 26 名、保育園児・職員 15 名参加）。 ・防災避難訓練やシェイクアウト訓練を実施することで、防災に対する「自助力」「共助」の意識向上がみられ、95％の生徒が「防災意識が高まった」と回答。
		災害時に行政、地域、近隣の学校との連携体制、災害発生時のシステムの構築	・防災・避難所体制の確立、機能の充実 ・防災・発災時における職員の危機管理体制の周知徹底及び職員体制の確立。	・避難所運営方法や応急救助訓練等の継続できる防災教育の実施。 ・定期的な校内の安全点検及び防火設備の使用方法の確認（職員研修の実施）。 ・避難所運営マニュアルの見直し。	B	・鏡消防署員による講話や初期消火訓練等の実演ができたことは大きな成果であった。生徒の真剣な訓練態度に感心されていた。 ・学校運営協議会において、八農版防災マニュアルを基に、学校体制及び地域、行政との連携確認ができた。・事務部の協力により備蓄品や防災設備点検が実施できた。
道徳教育	道徳性の涵養	全体計画にもとづく教育活動の推進	・百周年記念事業や学校行事等を通して愛校心の育成 ・自己肯定観を深化させ、道徳性を涵養するホームルーム活動や授業を展開	・百周年の伝統を誇りに本校生としての自覚を育成する指導の充実。 ・実学を通したスペシャリストとしての自覚と責任感の育成。 ・学校生活への満足度や愛校心が高まる指導の展開。 ・全校集会の講話やキャリア教育等を通して生き方を考えさせる ・学校行事等を通して感謝の心を育てる。	B	【成果】 ・八農に入学して（入学させて）良かったとアンケートで回答した生徒 85％（保護者 94％）。 ・学校は道徳性の涵養に努めていると回答した生徒 85％、保護者 89％。 ・学校行事や部活動、ボランティア活動が、生徒が自らのあり方、生き方を学ぶことに繋がっていると回答した生徒 82％、保護者 89％。 ・インターンシップや各種研修を通して専門教育の充実に取り組んでいると回答した生徒 90％、保護者 92％。 ・上記の結果から 100 周年記念式典の実施や農業クラブで全国大会最優秀賞受賞、各種の取り組みが、生徒や保護者の学校生活満足度や生徒の愛校心を高めることに繋がったと思われる。 【課題】 ・どの調査において 10～20％の生徒が学校生活に満足を感じていない。これらを減らす工夫が個々の教育活動が必要である。
特別支援教育	特別な支援を要する生徒のニーズへの対応	組織的な支援計画及び指導計画の作成と確実な支援の実施及び評価	・個別の指導計画作成率 100％。支援計画・指導計画の活用。	・特別支援教育推進委員会の内容を精選する。 ・生徒理解研修に加え、外部講師による研修を実施する。 ・支援計画と指導計	C	・支援計画の評価を委員会に組み込むなど工夫をしたが、精選できたとは言いがたい。 ・外部講師による研修は実施できた。 ・セキュア上に支援計画等を載せて見てもらうやり方を取り周知した。効

				画の活用について周知する。		果はまだ感じられなかった。
		校内の組織的な支援体制の構築	・確実な実態把握と実施から引き継ぎまでの流れをつくる。	・「保護者の気づき」を始めとする情報の共有化システムの構築 ・必要に応じてケース会議等を実施 ・外部研修に参加する。	B	・情報の共有化の一つとして「困り感」の入力シートを導入した。まだ利用は少ないが来年に向けて工夫の余地はある。 ・ケース会議を実施しその後の動きにつなげることができた。 ・リモート研修会に積極的に参加できた。
		進路先への引継ぎの取組み	・就労支援の充実のための情報収集と進路部、ハローワークとの連携	・進路部と共に担任、保護者への情報提供を行う。	B	・外部機関に依頼して、就労支援の実習などを一連の取組の中で実現できるよう担任と協力している。
環境教育	環境調和型社会の実現及び校内美化の推進	環境保全活動や学校版環境ISOなどの啓発活動	・環境保全活動及び学校版ISOの宣言の啓発	・教室及び校内における環境保全活動及び学校版ISOの宣言の掲示による啓発活動の実施 ・エコキャップ運動の推進	B	・生徒会総会等で環境委員会の活動とISOの取り組みについて説明後、各クラス委員からHRで説明し、年間を通して意識の高い状態が維持できた。ゴミの種分けがクラス単位で実施でき、収集所での作業が少なくなった。 ・ペットボトルのキャップも 12,900 個（30 kg）集め寄付出来た。
		校内美化活動の実施	・百周年記念式典に向けての校内美化の徹底	・校内美化コンクールの実施 ・生徒による安全点検アンケート	B	・学校創立 100 周年に向けクラス委員の取組により生徒個々の意識が向上した。来賓からも良い環境が維持されている旨の評価を頂いた。 ・生徒数の減少で美化コンクールを実施できなかったが、生徒の取り組みを褒めることで、それ以上の効果を得ることが出来た。
保健管理	健康に関する指導体制整備	新しい生活様式の習慣化	・家庭での検温、登校時の手指消毒、マスク着用、食事前の手洗いと手指消毒、教室の換気等、一人ひとりの基本的感染対策の周知	・職員朝礼時や会議等で常時周知する。SHR、学年集会、全校集会で保健便り等の内容、教室掲示。 ・職員健康観察表、アルコール消毒確認表、生徒健康観察表の活用。	A	【成果】 ・職員朝礼、生徒連絡の周知、集会時の注意喚起、教室掲示、健康観察表等の活用により、感染者を防ぐこと及び生徒・職員の感染防止意識向上につながった。 【課題】 ・蔓延防止期間では昼食時の注意喚起が必須となり、全職員の協力が必要。
		規則正しい生活習慣の確立	・保健だよりを通じた基本的な健康知識の周知と各種講演会を通じた健康意識の啓発	・薬物乱用防止、性教育講演会の実施 ・保健便りの定期発行 ・ICT を用いた保健授業の活性化 ・がん教育の実施	A	・保健便りは感染対策のほか、健康作りをテーマに月に1回発行した。
		保健相談の充実	・保健環境部と教育相談支援部との連携及び情報共有	全職員での生徒支援のため、毎月の保健室来室状況や個別面談結果を職員間で共有する	A	・毎月の保健室利用状況を周知し、日々の個別の面談結果についても状況共有できた。

安全管理	施設・設備の充実と危機管理意識の向上	施設、設備の安全の強化 危機管理意識の向上	・生徒、職員が安心・安全に過ごせる学校づくり 不測の事態に対応できる学校づくり	・学期毎に安全点検を実施 ・校舎内外の巡回を実施	A	・安全点検を実施し、その結果を受けて直ちに改善できた。 ・校舎内外の巡回を定期的に実施する。
				・心肺蘇生・アナフィラキシー対応研修の実施	A	・感染対策のもと、希望生徒や職員に研修を実施することができた。
				・感染症予防のため、校内の消毒を実施	A	・掃除時間に加え、消毒時間を設定し、職員と生徒で校内の消毒を実施した。
				・危機管理マニュアルを用いた職員研修の実施。 ・危機管理マニュアルの見直し。	B	・八農版防災マニュアルや避難所運営マニュアルを活用し、各部、各科などの協力及び連携を図りながら防災避難訓練や炊出し訓練等を実施できた。 ・運営協議会で委員の方からの意見を集約し、来年度に向けたマニュアルの改訂を行う。
専門教育	専門教育の充実	魅力ある学科づくり	・楽しい、おもしろい専門学習の実践 ・ICTを活用した専門教育の実践	・生徒が興味・関心を持つ授業や実習を展開するよう、各科学期1度検討会を行う ・ICTを活用した学習を全員が実施し、専門教育の魅力につなげる	B	・各学科、期末考査後、1 度検討会を行い、魅力ある授業や実習の展開について検討を行った。 ・ICTを活用した学習は個人差はあるが、活用機会が増えている。今後は活用法や事例など共有して充実に努める。
	高い専門性と職業観の育成	地域連携による専門教育の充実	・各科、地域連携による専門教育の発展的な取組を行う。	・それぞれの特色に沿った地域連携の取組みを各学科1つ以上実施し、専門教育の充実に繋げる	B	・コロナ禍であったが、地域関連機関等との連携による取り組みを 1 つ以上行い専門教育の充実に繋がった。コロナ感染拡大防止の観点から実施できない取り組みもあった。 【H2，F3，E1，S6】
	高い専門性と職業観の育成	教職員の専門性向上の充実	各学科の教職員の専門性充実のための研修等へ参加	・各学科の教職員1名以上、専門性充実のための研修等へ参加する	A	・高教研の研修や教育課程に関する研究発表会など各学科教職員が 1 名以上参加した。復講することで教職員全体への専門性向上に繋がった。【計18名】
		将来を見据えた系統的な学習展開	・新学習指導要領に沿った指導及び評価の実践 ・学科改編による教育計画及び施設等の整備	・各学科、各科目において新学習指導要領に沿った指導及び評価の実践を行う ・学科改編に向けた教育課程や施設設備の計画についての検討会を3回実施する。	B	・新学習指導要領に沿った評価について、農業部会などを通じて確認をした。評価の実践については今後行っていく予定。 ・学科主任を中心に、学科改編に向けた教育課程の作成や施設設備についての検討会を年間を通して継続的に行った。月 2 回程度実施。
		勤労観・職業観の育成	・現場実習（インターンシップ）の実施 ・講師招聘事業等による職業講話の取組	・コロナ対策を万全にした現場実習を実施する ・各学科、講師招聘の授業を行い、職業観の育成に努める	A	・コロナ禍ではあったが、職員、生徒及び受け入れ農家や企業と共通理解のもと、現場実習を実施できた。 【生徒アンケート】 将来について考える機会になった（95%），自分の適性を知れた（94%）

						・各学科、講師招聘授業を 1 回以上実施した。専門性の向上及び職業観の育成に繋がった。 【H2，F2，E1，S13】
	専門教育の発信及び交流事業	地域への発信	・記者クラブへの積極的投稿 ・各学科HP・ブログ等の更新	・記者クラブへの投稿を月計1以上行う ・各学科の情報をブログを月に計 20 件を目標に更新する。 ・広報や学校発信のポスター等に積極的に情報を提供する	A	・1 年を通じ、投稿を16回行い、13回の取材や撮影に繋がった。昨年度に比べメディアに取り上げられる機会も増え、本校の学びのPRに繋がった。 ・各学科ブログ更新を積極的に行い、計 20 件に届かなかった月もあるが、目標を概ね達成し、本校の授業の取り組みなど発信することができた。 ・係から各学科に依頼し、毎月「八農新聞」の発行を行った。また、広報誌への掲載も継続し、八農祭の告知などに関しては生徒会との連携や職員によるインスタの活用など協力して行うことができた。 【取材等によるPR：Doyou農業、若っ人ランド、JA広報誌、農業高校新聞、物産フェア展示など】
		小中学生との交流学習	・小中学生を対象とした交流学習や出前授業の実践	・小学生や中学生を対象とした交流や出前授業を各学科1回以上実施する	B	・学科によっては実施できなかったが、小中学校との農業体験交流やケーキ作り交流、製品開発等の取り組みができた。 【H3，F2実施】

4 学校関係者評価
【学校経営】 （教育目標の周知） ・保護者の認知度が95%は素晴らしいと思う。 ・生徒に教育目標を周知するのは、校長が集会等を通して繰り返し伝える必要がある。 （生徒募集） ・八農希望者が少ない。 （学校ホームページについて） ・今後、生徒がHPを見たくなるように検討することを提案。運用はやられているので活用することで改善されると思う。生徒が更新するページ作成など改善や新しい視点が必要。 ・閲覧数＝成果　にはなっているとは思えない。HP更新を楽しみにしている人がどれだけ居るのか。私は楽しみだが他はどう見ているか不明。 （八農新聞の配布） ・新聞配布はよくなされ、各中学校で掲示してくださっている。サイズを大きく変更してはどうか。 （業務改善） ・（教職員からの）回答を有効に利用できれば改善点が明確になると思われる。「不可」の回答は一番の八農に必要なメッセージ。 ・先生方は早朝出勤、休日出勤、長期休業日などの出勤も多く、業務改善の難しさを感じる。 【学力向上】 （基礎学力の向上、定着） ・朝の基礎学力向上の取り組み（一日一善）が習慣化されていることは素晴らしい。継続は力なりと思う ・基礎学力の定着について、小中高での連絡会の場などがあればよいと思う。 【キャリア教育】 ・離職の理由を知りたい。県も離職については問題としているが、改善への一歩が未だに進んでいない。 ・今後のキャリア教育の充実をさらに期待します。 【生徒指導】 （生徒会活動） ・生徒会とPTAとの対話を提案している（3年前）。R4年度は実現したい。 （安全・安心な学校づくり）

・生徒の交通事故が3件あったが、場所が安全かどうかを保護者と共有して欲しい。
・交通教室は、是非実施していただきたい。
【人権教育の推進】
（教職員の実践的指導力向上）
・オンラインによる研修など時間の確保により、充実して欲しい。
（問題行動等の未然防止）
・メール配信でよく周知されている。
【いじめ防止】
（未然防止）
・学校のいじめ防止の取組みに否定的な意見が25％あった（生徒回答）。全ての対応を100％できるかどうかよりも、見守ってもらっていると感じさせることを生徒に伝わるようにできないだろうか。独りであるような感覚は、今の生徒には大きなマイナスを生むと思われる。
【コミュニティー・スクール】
（自主的に学び考え行動できる生徒の育成）
・生徒自身が住んでいる地域や通学の際に通る地域の災害リスクや危険性についても自治体等が提供しているハザードマップ等を活用し、日頃から把握することで、リスク低減につながる。また、防災・防犯情報を入手する手段を確保し、生徒自身の危機管理能力を高めて欲しい。
【道徳教育】
・本校への入学の満足度や専門教育の充実、道徳性の涵養といったことについて、生徒と保護者のアンケートから10～20％が、学校の取り組みが不十分との回答がある。この声をどれだけ大切にできるかで、今後の八農志願者が増えるかどうかが左右されるように感じる。
・学校生活に満足を感じない生徒の割合を減らすための取り組みを考える必要がある。
【保健管理】
（コロナ感染症対策）
・感染防止の取り組みについて、当たり前を揃えることが一番難しいと感じる。
【専門教育の発信・交流事業】
（小中学生との交流）
・小学生からは、年度の思い出で、八農での体験を発表してくれた児童が数名いたと聞いている。
・交流学習を今後も継続していただきたい。
（地域への発信）
・発信を積極的に行うことは多いにPR効果があると思う。

５　総合評価

本年度の学校教育目標から7つの重点目標を掲げた。各重点目標の評価は次のとおりである。
（1）すべての教育活動における課題解決の推進と危機管理の徹底
・今年度、新たな 17 のプロジェクト（指定事業を含む）を立ち上げ、全職員が校務分掌を超えた新たなチームを編成した。この取り組みにより、教職員の学校経営への主体的な参画の意識が向上したことで、各種の課題の発見、解決に向けた取り組みが進んでいる。
・新型コロナウイルス感染症や校内外における事故や事件についての情報共有が行われたことで、早期解決が迅速に図られることに繋がっている。
（2）学校・学科等の魅力ある教育の深化
・教育課程や学習内容の見直しにより、学習の魅力化や深化が図られた。
・外部講師の招へいや先端機器を使った講習の実施等が多く実施され、生徒にとって魅力ある教育内容の充実が図られた。
（3）効果的な情報発信と生徒募集への取組の推進
・「八農新聞」の近隣中学校への毎月配布やホームページの更新回数の増加、インスタグラムによる情報発信、報道機関への情報発信等、多方面での取り組みが積極的に行われ、ホームページの閲覧回数も昨年度に比べ大幅に増加している。
（4）効率的、効果的、教職員の協働による教育活動・校務処理の推進
・業務改善の具体的な取り組みについては概ね実施や運用ができた。
・新たな 17 のプロジェクト（指定事業を含む）により、校務分掌を超えた新たな協働の場から学校の諸課題に取り組むことができた。次年度もこのプロジェクトを継続していく。
（5）安心・安全で差別やいじめのない学校づくり
・いじめ防止の取り組みとして、スクールサインの周知や、毎学期の心のアンケート、学期始めの担任面談、新たな絆をつくる面談の実施等、多方面で行っている。いじめの認知件数は少ないが、生徒の学校評価アンケートでは、学校の取り組みが十分でないとの回答が多く見られた。このことから、生徒の様々な状況を把握できる取り組みが必要である。
（6）特別な支援を要する生徒への全職員共通理解による取組の推進
・SCやSSWの活用や外部機関との連携、保護者を交えたケース会議を個々の生徒の状況に応じて取り組んだ。

(7)地域の資源や人材を最大限に利活用した教育活動と教職員研修の推進

・新型コロナウイルス感染症の影響で、様々な活動が制限されたが、感染防止を徹底することで昨年度より多くの活動が実施できた。
・地域の小中学校との新たな交流学習やコミュニティ・スクールへの参加等ができた。今後も本校生徒の学習成果の発表の場として取り組む。
・研究授業を全教科、学科で行うことができた。

6　次年度への課題・改善方策

・業務改善が、教職員の実感には繋がっていない。今後も業務改善を意識し、細かな点を積み上げていくことが必要である。
・新たな17のプロジェクト(指定事業を含む)を次年度もこのプロジェクトを継続していく。
・新型コロナウイルス感染症対策や事故や事件についての啓発や日常の安全点検等の未然防止の取り組みに重点を置きたい。
・生徒情報をさらに共有する校内体制の整備を図る。
・学校の様々な教育活動についての情報を発信し続けることが生徒募集へつながるため次年度も継続して行う。
・特別な支援を要する生徒や課題を抱える生徒への合理的な配慮や支援について、職員のスキルアップを図るとともに、組織的に取組める指導や支援の体制づくりをより一層進めていく。
・各生徒の進路実現に向け、外部の専門機関等と連携しながら1年次より系統的に取組むとともに、各生徒の学習到達度に応じた学習指導の充実を図る。
・校内での研究授業を各教師が、年間1回以上実施する。
・他校の公開授業に各教師が、年間1回以上参加する。
・いじめ問題等の職員研修を充実させる。